童

2011.4、28

林檎の木に、可愛い葉が芽吹き始めました。これからは、日毎にぐんぐん伸びて、連休には、可愛いピンクの花が満開になることでしょう。秋に植えたチューリップも、ようやく蕾が膨らんで、まさに、朝のお祈りのように、春風の中で、まもなく、その可愛い姿を見せてくれることでしょう。

新学期が始まり、一ヶ月が過ぎようとしています。天候が目まぐるしく変わり、薪ストーブも、まだまだ、全開の日も多く、ぽかぽか眠くなる「春眠　暁を覚えず」という訳にはまだいかない日々が続いています。しかし、子ども達は、ぽかぽか陽気の気持ちで、ゆったりと、たくさんのわらべ歌で朝が始まり、一人一人が輝きながら、外で遊び、ゆっくりとお昼を食べ、室内では、人形劇や紐つなぎによる電車ごっこなど、今年度特有の遊びを見せてくれます。

絵本も、週２回年齢別に読み、月曜日の絵本ボランティア、お話も、週２回と行われ、大地の目指す「わらべうた・お話・絵本・人形劇」を、４月から、しっかりと楽しむことができ、うれしく思っています。

「食」も、給食（ノビルせんべいやノカンゾウ）やつくしのおひたしなど、春の恵みを穏やかに頂くことが出来ました。　ゆっくりと、大地の目指す教育を楽しんでいきたいと思っています。

【東京子ども図書館】

自転車を袋に入れて、肩から提げて、午後１時、「お話のろうそく」を読みながら高速バス停でバスを待ちました。久しぶりに旅に出る気分。高速バスでは、案の定、隣席の携帯電話やゲーム機の動きにとまどいながらも（帰りもずっと携帯ゲームをしている隣席）、課題の本を読みながら、新宿へ向かいました。午後５時半、ビジネスマンで溢れるビル街の歩道で、自転車を組み立てると、既に東京人。颯爽と自転車を漕いで、高田馬場方面へ向かうが、飯綱町と違い、人と自転車をスリ抜きながら神経を使う事が厳しい。

背中のリュックには、教科書とお昼に採ったふきのとうとお蕎麦。３年前に講演で知り合い、大人の幼稚園の常連である若い夫婦の家が、東京子ども図書館のすぐそばにあるので、このお宅にお邪魔して、３人で、天ぷらそばを造り遅くまで盛りあがった。

他人の家でも、翌朝４時には目が覚め、課題の本を読みレポートをまとめ、５時には、自転車で都内を巡る。まず東京子ども図書館の玄関前で、２年間の学びを祈る。それから、２７年前に保育の道を目指し学んだ目白の学校や、その時の下宿先や結婚前に妻と過ごした思い出の場所などを自転車で走った。池袋から新宿、代々木方面の早朝ツーリングは新鮮だった

友人宅に戻り、朝ご飯を作り、友人夫婦と別れを告げ、再び母校で先生達としばらく歓談してから、東京子ども図書館へ向かった。９時半到着。自転車姿の男性に驚かれながら、図書館内へ。講習生は２１名。２５才位から７３才位までの精鋭揃い。図書館司書や幼稚園小中学校の先生やお話絵本ボランティアグループの人達で、年齢的にいっても、青ちゃんは若いほうか。図書館の職員１０名を含めても、男性は、３０人中青ちゃん一人。これは、保育の道を目指したときから慣れており、自己紹介も、青山だから、ほぼいつも１番。講習生達は、さすがに海千山千で、お話を愛し、そして、それぞれの現場でしっかりと活動しているだけあって、自分のいい加減さが身に染みた。

今回の受講の動機の一つには、自分自身の内面へ向かう内的世界の充実、簡単に言えば、静的な世界を通じて、「ゆったりと丁寧に動く」取り組み、トレーニングを、お話を通じて、そして仲間達との交流により、自分自身に課したいという理由があった。お話は、地道に丁寧に心を安定させて禅のような気持ちで取り組む事が大切だけに、今まで活動的、創造的、動的にエネルギーをかけてきた人生から、これからのそれは、静的な芸術的な内面的な世界へシフトしていくタイミングに来ていると感じる。大地の子ども達の１日の活動の流れに、動と静が半分ずつあるように、自分の人生の後半には、静的な世界が訪れているのだろう。それが、お話かもしれない。

折角全国から集っている２１名との新しき出会い。２８期生というクラスだけに、大人の濃いコミュニティを楽しんでいきたい。そんな願いから、早速、帰ってきてから、東京子ども図書館お話会の木の看板を作ったり、クラスアンケートなどを企画して、皆が大地風に楽しめるように準備を始めた。もちろん、誰もがこの世界で崇拝している「松岡享子先生」にお手紙や写真を送り、事前に許可をお願いした。

その後、いきなり、松岡享子先生からお電話を頂いた。とても喜んで下さり、「今回の２８期生は、青山さんと○○さんがいらっしゃるから（この人は、長野市在住で妻のお話グループ所属で私も良く知っており、しかも、高校の後輩。同じ地域から２名選ばれることはほとんどないらしい)、かなり面白くなりそうね」と盛りあがって下さった。

先生「ところで、その大きな木の看板はどのように持っていらっしゃるの？」
青山「自転車で行くので、おんぶひもで背中にくくりつけて行きたいと思います」
先生「それは　面白そうね、おほほほほ・・・」
青山「男のﾛﾏﾝですね」

会話の随所に、さすが「ついでにペロリ」など数々のお話や児童文学を翻訳しているだけあって、ユーモアとそのセンス、そして、子供心には敬服した。もちろん、オリエンテーションで、お話してくれた「かしこいモリー」 は、最高だった。妻は、松岡享子先生の直々のお話は貴重でそんな機会はなかなかないと、羨んでいた。

ともあれ、５月６日の授業１回目に、私が「ついでにペロリ」を話す事になった。このお話は、松岡享子先生訳、そして、先生自身もこれを話し、これを話す人には、かなり厳しい批評をするらしい。相当、丁寧に準備しなければ。いきなり最初から、丁寧さときめ細やかさを試される。

「現代の教育で、皆さんは　ＯＯせねばならない、ＯＯの基準に合わせねばならないなど、こうあらねばならないというような中で生きてきています。」

「東京子ども図書館のお話講習会では、お話を、東京子ども図書館流に合わせたり、東京子ども図書館のお話基準・マニュアルで判断したり尺度を学んだりするのではありません」

「お話は　あなた自身が、世界であなただけが、おなただけのお話を語るのです。私たちは、あなた方があなた自身のお話が輝けるようなお手伝いをしたいのです」

「だから、緊張するのではなく、東京へ来るのが楽しみで楽しみで仕方がないという気持ちで来て下さい」